「反応」とはいったい何？

今日は、一枚の授業風景の写真から始めます。下は、生徒が教室の後ろに出て発言している写真です。狙って撮ったわけではありません。たまたま入った学級で私の目に飛び込んできたワンシーンです。

私は「おやっ？」と思いましたが、生徒のみなさんはどうですか。このクラスが特別なのではありません。どの学級にも同様の光景が見られます。しっくりこないものを感じなかったら、あなたの学級でもこういう光景が日常的に見られ慣れっこになっているのかもしれませんよ。

指名を受けた生徒は、赤い矢印がついている自分の席を離れ、教室の後ろまで進んで発言を始めました。こういう姿は、小学生にも見られます。おそらく、小学生の時に身につけた「皆が見えるところで話す」を忘れず実践しているのだと思います。

すばらしいことですね。聞く人に配慮した素敵な姿だと思います。皆さんはそれを当たり前にやっているので、そう言われてもピンとこないかもしれませんね。小学校の先生がみなさんに身につけさせてくれた力だと言ってよいと私は思います。

「話します」と言ってから発言するのも同じです。「これから話しますが、皆さん準備はいいですか」と、聞き手に対する配慮を表しています。人前で話すというと、話す内容や言葉の発し方（音量、速さ、間など）が注目されますが、声を発する前の段階の、聞き手に対する配慮は、スポーツでいうとグランドやコートの整備、道具や用具の手入れにあたり、最高のパフォーマンスを生み出すためになくてはならないものです。

でも、おかしいですよね。配慮はできているはずなのに、発言している生徒が投げたボールを、同じグランドに出ているはずの仲間は、ボールが飛んでくる方向と違う方向を見て受け取ろうとしています。話し終わった後「わかりました」という言葉は返ってきましたが、確実に捕球できたかどうかは、私にはわかりませんでした。

見えるところに出るという行動や、「話します」と発した気遣いに対しても、仲間の「反応」はあるべきではないのかな。「反応」は「わかりました」のような言葉ばかりではないような気がします。

（一月二十九日　記）